

## チューター・チューティーの変化から見た チューター活動の評価

森 久栄・神殿織江・高嶋典子・田中愛佳・小森田香織

学習支援としての学生によるチューター活動を活性化するために、チューター選出の推薦制、事前研修会の義務制、有償制などへと方法を見直して取り組んだ。その成果を評価するために、チューター・チューティーに定量的なアンケートを実施した。参加したチューティー数は従前の2～3倍に増えた。チューティーは参加前に比べると参加後には試験に対する不安感はやや低下し、満足度は100%であった。チューターの人数も3倍に増えた。しかしスケジュールが合わないことからチューターとして待機していても担当できず、指導経験を得られなかったチューター（非経験群）も発生した。実際に相談や指導を担当したチューター（経験群）は事後にチューター任務に対する自信の程度は高くなっていった。また、事後における自信の程度は、経験群の方が非経験群よりも高かった。経験することで自己効力感が増すことが示唆されたため、今後はチューター全員が経験を積むことができるようにスケジュールを検討する必要がある。

キーワード：チューター、チューティー、学習支援、自己効力感

### 1. はじめに

近年、高等教育機関において、基礎学力の不足が問題となっており、学力向上を含めた学生の成長を促すための組織的な支援が求められている<sup>(1)</sup>。本学においても、入学前・在学中・卒業後教育といった時系に沿った支援、課程内・課程外における学習支援、直接的な学習を支える設備や資源といった側面的な支援など、様々に取り組んでいる<sup>(2)</sup>。

本学の在学中における直接手段としての学習支援制度は、①科目担当教員が学生の質問などに応じる「オフィスアワー制度」、②基礎学力不足により科目の理解が遅滞する場合など、基礎学力の補習のために高等学校の教諭が行う「スタディサポート制度」、③2年生が1年生に相談や学習指導を行う「チューター制度」の3層により配置されている。オ

フィスアワーは2014（H26）年度に、スタディサポートは2018（H30）年度に、そしてチューター制度は2017（H29）年度に発足し、いずれも正課外に置かれている<sup>(2)</sup>。校務分掌において、オフィスアワー制度とスタディサポート制度については教務部管轄であるが、チューター制度については図書館委員会が担当部署となっている。

本学のチューター制度は、学力不振や初めての定期試験に不安を抱く1年生が多く、定期試験前後に退学を考える学生もいたため、試験の対策相談や科目の不理解箇所の教示、といった相談・指導を開催し、1年生の不安感を軽減しようとした取り組みが発端である。

しかし近年は、チューターとなりうる2年生がカリキュラム上多忙な上、試験前の切迫

した時期であるため成り手が少ない、1年生チューティーへの周知浸透も芳しいといえない、さらにコロナ禍が追い打ちをかけ、この数年は活性化が課題となっていた。このような背景から今年度、チューター活動の活性化を目指して、方法を大きく見直し評価を行うこととした。本来の活動目的は、チューター活動をとおしたチューター・チューティー双方の学習能力向上や成長である。チューティーにとっては直接学習支援を受け、チューターにとっても教えることで様々な教育効果が期待される<sup>(3)(4)</sup>。しかし学習能力の向上や成長には複雑な要因があり、結果が出るまでに時間差があるため、実施直後すぐには把握できるものではない。学習成果が表れる前のプロセスには意識や態度などに変化が見られることから、内在面の変化も指標として事業評価が行われている<sup>(5)</sup>。そこでアンケートにより、活動に対する評価ならびに、定量的にチューター・チューティーの実施前後の変化に着目しチューター活動の評価を行ったので報告する。

## 2. 方法

### 2.1. チューター活動の方法

①**チューターの選出条件と方法** チューターの士気と質を担保するために、次の4点を取り入れた。まず、成績・人物ともにチューターにふさわしい人材として学科教員からの推薦制とした。次に有償ボランティア程度の謝金を予算化した。さらに事前研修会の受講を義務づけることとし、チューターの心得などを指導の上、1年生の科目の学習内容の復習を促した。そして、任務遂行の根拠となるよう学長名の任命書を渡した。

②**開催日時** 前期定期試験2週間前と1週間前の補講期間週で比較的空き時間が多い2日間を選び10時から17時のうちチューターが携わることのできる時間帯で担当スケジュール表を作成した。

③**周知** 教員からの勧奨のほか、本学教学通知システムを利用し、1年生には、当該時間帯に学科コース別に2年生が何人待機しているかを明らかにしたスケジュール表を示して周知した。チューティーの予約は不要とした。

④**評価の指標** 評価フレームをアウトプットとアウトカムに分けた。評価指標において、アウトプットにはチューティー数とチューター数を用いた。アウトカムには本来のプログラムの成果指標である参加者側（チューティー）の満足度と、不安や疑問の解決の程度を用いた。指導者であるチューターの育成の指標として受諾動機と任務遂行に対する自己効力感を用いた。

### 2.2. 参加者へのアンケート実施方法

#### ①アンケート内容

アンケート用紙を文末に示す。

チューティーへの質問項目は、所属のほか、参加理由（4分類）と解決の程度（4件法）、参加満足度（4件法）、開催日数と開催時間の適切さ（3分類）、事前事後の疑問や不安の主観的な大きさ（5件法）であった。

チューターへの質問項目は、担当人数、チューターを引き受けた理由（受諾動機）、チューター任務に対する自信の程度（自己効力感）とした項目である。いずれも事前事後それぞれ5件法で選択肢を設け変化を見た。

②**説明と同意** アンケートは1枚の用紙に事前事後の記入を求めた。よって事前事後を連結する必要のない無記名アンケートであるため本調査は倫理審査を必要としない。アンケートを求める際には①回答は自由意志であり、提出後も撤回できること。②得た結果は研究発表に利用すること。以上2点を口頭で説明を行い、アンケート用紙の提出をもって同意とみなした。

③**解析と検定** 解析にはIBM社のSPSS Statistics Ver.22 Exact Testsにより、ノンパラメトリックで標本が少ない場合であっ

でも検定ができるよう、対応のない数値の2群間の比較にはMann-WhitneyのU検定、対応のある数値の2群間の比較にはWilcoxonの符号付き順位検定を用いた。危険率は0.05未満とした。

### 3. 結果および考察

#### 3.1. アウトプットによるプログラム評価

##### ①チューティーの参加数と参加理由

チューティーの参加者数と参加理由を表1に示す。

チューティーの参加人数は2日間で実人数24名、延べ人数25人(食物栄養学科64%、キャリア創造学科36%)であった。

チューティーの参加理由は両学科とも「試験」について聞きたい学生が88%いた。食物栄養学科では「科目内容」について聞きたい学生も68.8%いたが、キャリア創造学科では11.1%であり、学科に特徴がみられた。

本プログラムは、試験に対する不安感の軽

減と学習支援を目的に実施されており、これらの目的は1年生のニーズに沿ったものであることが今回のアンケートで再確認された。

##### ②チューター数とチューター配置体制

チューター数と1人当たりのチューターが何人のチューティーを担当したかについての実績を表2に示す。

チューターとして17人が配置され、1人当たりのチューターが担当した人数は平均3.2人であった。しかし、チューターが待機していても参加者がいない時間帯もあり、17人のうち7人は担当人数0人であった。

また開催時間は「ちょうど良い」が96%、「短い」が4%であったが、開催日数は「ちょうど良い」72%、「少ない」24%、「多い」4%であり、少ないと感じている人も約1/4いることがわかった。

過去の実績をコロナ影響前2年間で調べてみると、2018年に開催日数5日、チューター5人、チューティーはのべ人数で8人であった。2019年では開催日数8日、チューター5人、チューティーは12人であった。今年度は、開催日数は2日間と少ないがチューター・チューティーの参加数は2倍から3倍と増えていることがわかり、効率的な企画運営ができたと考えられる。しかし一方で、授業最終週と補講期間に開催した結果、チューティーにとって参加できる日時が限定され、待ち時間が発生するなどの事態も発生した。開催日数が「少ない」ととらえているチューティーも4人に1人いたことから開催日数など見直しが必要である。

またチューター配置体制においては、参加しやすいように授業や補講の時間割を事前に調べてスケジュールを組んだが、その後の変更によりチューター数とチューティーの来館数とが釣り合わない状況が発生した。そのため、急遽シフト外のチューターを要請するなどの対応を行った。1人で複数人同時に担当するチューターがいる時間帯がある一方で、

表1 チューティー参加人数と参加目的

	全体	食物栄養学科	キャリア創造学科
チューティー数 <sup>※1</sup> 人	25	16	9
(のべ)	100.0%	64.0%	36.0%
試験 人	22	14	8
(複数回答)	88.0%	87.5%	88.9%
科目内容 人	12	11	1
理由	48.0%	68.8%	11.1%
短大生活 人	1	1	0
回答	4.0%	4.0%	6.3%
その他 <sup>※2</sup> 人	2	0	2
	8.0%	0.0%	22.2%

※1: 実人数は24人

※2: 行事(ファッションショー)

表2 チューターの参加者数と担当人数別内訳

	全体	食栄	キャ
チューター数 人	17	8	9
	100%	47.1%	52.9%
担当人数別内訳			
0人	7	1	6
1~2人	3	3	0
3~5人	5	3	2
6~10人	2	1	1
11人以上	0	0	0

※1: キャリア9人の内訳は製菓1, ファッション3, プライダル1, ビューティ2, 産学2

チューターが待機していても担当しないまま終了した時間帯もあった。分析したところ、授業最終週の午前の時間帯には、12週で終了する実験が空きコマであったため、チューティー参加人数が多かった。また補講期間に開催したが、急な補講が入ったことにより待機していても参加者が来なかったことが確認された。

以上のことから、今年度のチューター活動に対するアウトプット評価は従前よりもチューター・チューティー共に大幅な人数増となったことから、一定の成果を得たと評価できた。一方で、実施体制としては、開催日時・方法など効率的なスケジュールリングの検討が必要であるといった課題を残した。

### 3.2. チューティーのアンケートから得たアウトカム評価

#### ①参加理由（聞きたい内容）の問題解決

チューティーの参加理由が参加後に解決されたかについて、「試験」と答えた人の回答を図1に、「科目内容」と答えた人の回答を図2に示す。

参加後に不安や疑問が解決した程度を聞いて

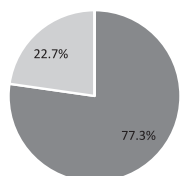


図1 解決したか：試験 n=22

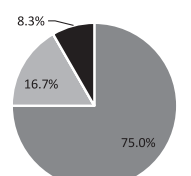


図2 解決したか：科目内容 n=12

たところ、無回答1人を除いて、全員が「解決した」または「かなり解決した」と答えた。「あまりしなかった」、「まったくしなかった」はいなかった。

#### ②参加満足度

参加満足度を図3に示す。

4件法で尋ねた参加後の満足度については、96%が「とても満足」し、4%が「かなり満足」していた。「あまり満足していない」「不満」はいなかった。

#### ③事前事後の不安や疑問の程度の変化

相談前後の客観的な比較として、不安や疑問の程度を数値尺度で表した。それぞれ「試験が不安」、「授業がわからない」、「学生生活が不安」について、「強く思う」を5点、「思わない」は1点として5点満点で点数化したものを図4～6に示す。

参加前に「試験が不安」4.6点、「授業がわからない」3.2点、「学生生活が不安」2.4点であったが、それぞれ2.9点、2.7点、2.2点といずれも下がっていた。最も程度が高かった「試験が不安」では参加後に1.7点の有意

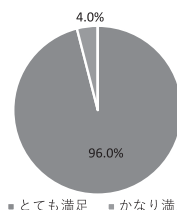


図3 参加満足度 n=25

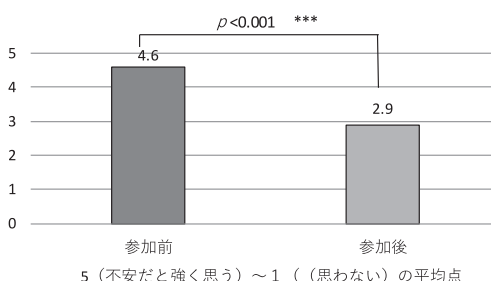
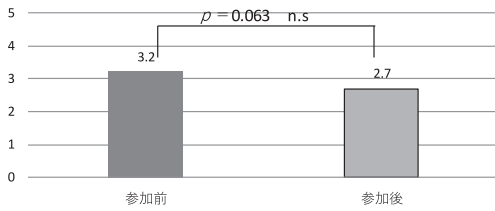
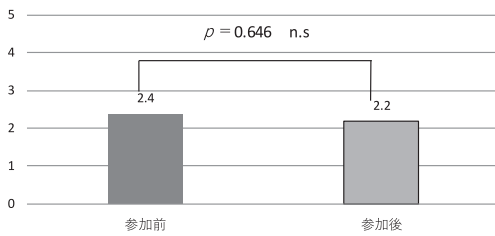


図4 試験が不安 (n=前後とも回答した24人)



5 (わからないと強く思う) ~ 1 (思わない) の平均点

図5 授業内容がわからない  
(n=前後とも回答した21)



5 (不安だと強く思う) ~ 1 (思わない) の平均点

図6 学生生活が不安  
(n=前後とも回答した21人)

な低下があった。

以上のことから、チューティーに対するアウトカム評価としては、参加理由である不安や問題がいずれも解決したと答えており、主観を裏付けるための数値による事前事後の評

価とも矛盾がなく、さらに、参加後に満足感を持っていたことから、成果があったととらえることができた。

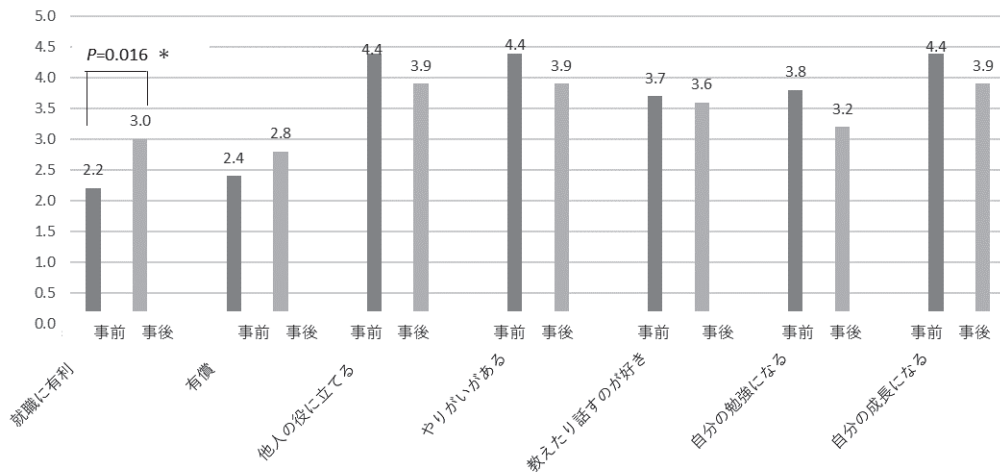
### 3.3. チューターのアンケートから得たアウトカム評価

#### ①チューターの受諾動機

事前のチューター受諾動機が事後にどのように変わったかを図7に示す。

17名全体の傾向として、「人の役に立てる」、「やりがいがある」、「自分の成長になる」といった内発的動機は高く、「就職に有利」、「有償」といった外発的動機は低めであった。実施後は外発的な「就職に有利」、「有償」の点数が他項目とは異なり上っていた。また、事前事後で統計的有意差があった項目は「就職に有利」であった。今回、有償での取り組みを行ったが、有償であるからといって、大きくチューター受諾行動に影響したようには考えられなかった。それよりも「先生から推薦された」、「大学から命を受けた」、「選ばれた」という意識のほうが受諾行動に寄与していたのではないかと考える。

担当のなかったチューター（以降：非経験



5 (強く思う) ~ 1 (思わない) の平均点

図7 チューター受諾理由 (n=17)

群)の人数が多いため、これらを除いて、実際にチューターとして経験した群(以降:経験群)だけで同様の解析を行ったところ、図8に示す結果となった。

チューター経験群は「自分の勉強になる」を除くすべての項目で事後の点数が上回っていた。有意差があった項目は「教えたり話すのが好き」で3.7点から4.7点に上昇していた。コメント欄には「悩みが解決したと言ってくれた」、「たくさん会話できた」、「1年生と親しくなれた」との記入があった。「教えたり

話す」経験の中でチューティーから得たポジティブな言葉や体験や感情を得たことがプラスの変化につながったのではないかと考えられる。一方、図7で非経験群も合わせた解析で、「就職に有利」、「有償」の点数が他項目とは異なり上っていた理由も、経験しなかったために「就職に有利」、「有償」しか実感できなかったのではないかと推察された。

②チューター任務に対する自己効力感

「チューター任務をうまくやれる自信」について5段階での事前事後の変化を、全体・

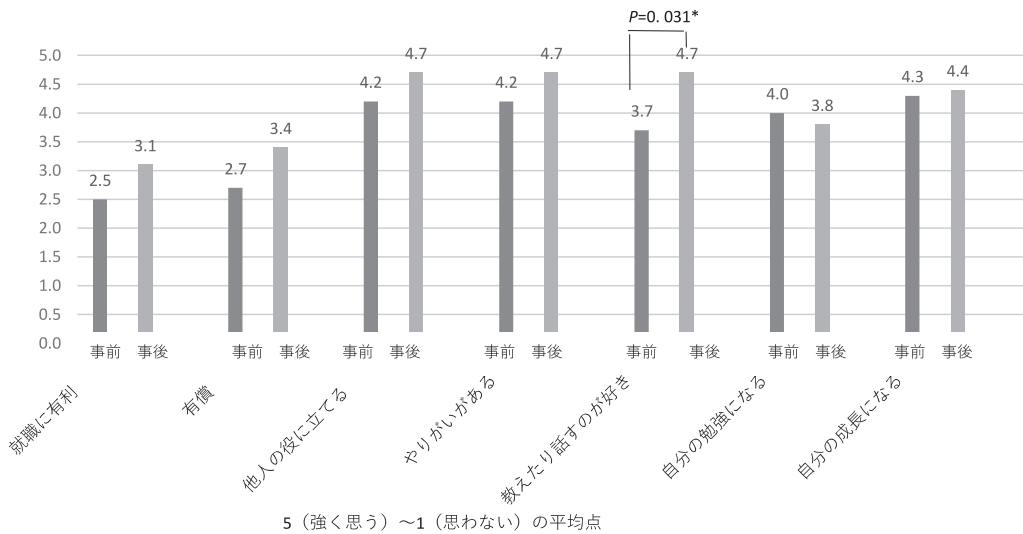


図8 チューター受諾理由 (経験群) (n=10)

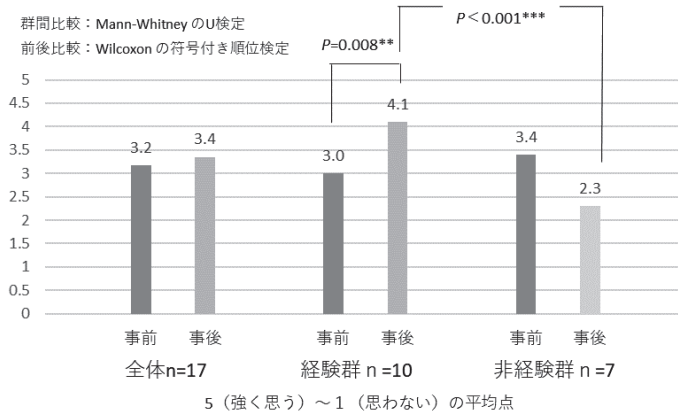


図9 チューター任務をうまくやれる自信



経験群・非経験群別に図9に示した。

自信の程度は事前では全体3.2点、経験群3.0点、非経験群3.4点であったが、事後では、経験群が4.1点に有意に上昇し、非経験群は2.3点に低下をみた。非経験群のコメント欄には、「一人も担当できなかったため」と記入されていた。

また、「自信のある項目」を図10に示す。

本学学生は「基礎科目の知識」「専門科目の知識」「問題の分析力」などの能力よりも、「コミュニケーション力」や「気持ちに思いやる力」といった能力の方に自信がある傾向があった。

経験群において有意差はないものの、「基礎科目の知識」以外の項目で事後に点数が上がる傾向を見せたのに対して、非経験群ではすべての項目で事後の点数が低下傾向であり、「基礎科目の知識」では有意に低かった。

とりわけ事後の群間差をみると「コミュニケーション力」、「気持ちに思いやる力」において、経験群の方が非経験群に比べて有意に高かった。非経験群はチューターとして一人も実績がなかったことから、自信の程度を把握できなかったかあるいは減少してしまったのではないかと推察された。

ある行動をうまくやり遂げる自信を自己効力感という。自己効力感が高いほど行動する確率が高くなる<sup>(6)</sup>ため、自己効力感を高める支援が必要となる。自己効力感を高めるには、①自己の成功経験（自分が過去にその行動を成功したことがある）、②代理的経験（自分と似た状態の人がその行動を成功していたことを見る・聞く・知ること）、③言語的説得（信頼できる人や客観的な判断ができる人からあなたならうまくやれると説得され励まされること）④生理的・情動の状態（その行動を経験した時に生じるとても楽しかった・うれしかったなどの生理的や感情の状態）の4つを高めることが重要とされている<sup>(7)</sup>。本調査では「チューター任務をうまくやる自信」を自己効力感として質問に組み入れた。教員からあなたはチューターにふさわしいから推薦されたのでぜひお願いしたい、といった依頼を受けたことは、言語的説得にあたる。また、経験群が体験によりチューティーに喜んでもらえた経験は、さらなる自己の成功経験を生む。そして喜んでもらえたことが自分にとっての喜びとして生理的・情動の状態の高まりを実感する、といった点から、経験群が事後において非経験群に比べて、自己効力感

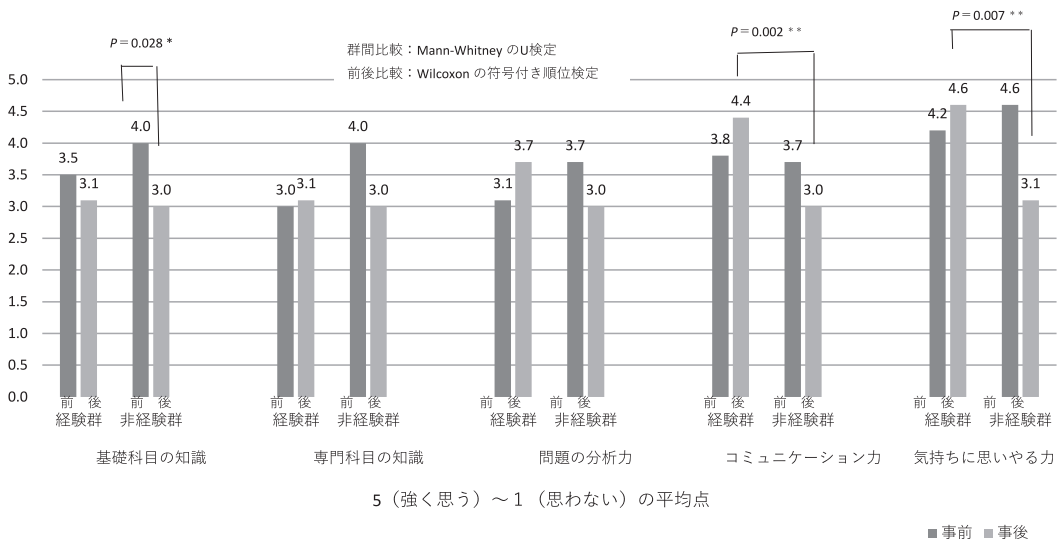


図10 自信のある項目

の向上につながったのではないかと推察された。

以上、アウトカム評価としてのチューターの変化をみたとき、経験群において事後に自己効力感が高まるといった成果が確認された。

#### 4. おわりに

本学チューター活動において以前より課題のあったチューターおよびチューティーの参加人数の低迷について、PDCA サイクルに則って実施方法を見直し、新たな取り組みを行った結果、大幅な人数増があったこと、チューティーの不安解決、チューター経験者の自己効力感の向上になったことが明らかになった。

今後はチューター全員に経験を積むことができるような実施方法により、チューターの成長を考えた取り組みを検討する必要がある。

#### 謝辞

本活動ならびにアンケートにご協力いただいたチューターおよびチューティーの皆様、また、チューター活動にご意見ご協力いただきました教員の皆様方にこの場を借りまして深くお礼申し上げます。

#### 文献

- (1) 文部科学省：学士課程教育の構築に向けて（答申），2008年12月，中央教育審議  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)（閲覧日：2022年10月1日）
- (2) 大阪夕陽丘学園短期大学自己点検・評価報告書令和4年6月 大阪夕陽丘学園短期大 PP58-78. 2022  
<https://www.oyg.ac.jp/js/about/information/>（閲覧日：2022年10月1日）

- (3) 清水栄子，山田剛史：高等教育機関におけるピア・サポートの現状と課題（教育的効果の視点から），リメディアル教育研究，9（2）. PP122-129. 2014
- (4) 小林敬一：他の学習者に教えることによる学習はなぜ効果的なのか？—5つの仮説とそれらの批判的検討—，教育心理学研究，68. PP401-414. 2020
- (5) 文部科学省 国立教育政策研究所，社会教育実践研究センター：社会教育推進のPDCA サイクルを確立するために必要とされる評価指標の在り方に関する調査研究，PP1-18. 2015  
<https://www.nier.go.jp/jissen/chosa/houkokusyo1-26.htm#research-261>（閲覧日：2022年10月1日）
- (6) Bandura A: Theoretical perspectives. In A Bandura, Self-efficacy: the exercise of control. New York: W.H. Freeman and Company PP1-35. 1997
- (7) Bandura A: Sources of self-efficacy. In A Bandura, Self-efficacy: the exercise of control. New York: W.H. Freeman and Company PP79-115. 1997



**参加アンケート【1年生用】** (複数回きたらその都度記入)

年 月 日 利用回数 ( ) 回目

食物栄養学科  
キャリア創造学科 製菓、ファッション、ブライダル、ビューティ、産学

(1) 来館目的に○をつけてください (複数回答可)。  
空欄には具体的なことがあれば記入して下さい。

①科目の学習内容について聞きたい 科目名など
②試験について聞きたい
③短大生活について聞きたい
④その他

**\*こちら側は終了後に記入し回収箱に入れてください\***

- (1)参加しての満足度  
とても満足 ・ かなり満足 ・ あまり満足していない ・ 不満
- (2)開催日数について  
多い ・ ちょうどよい ・ 少ない
- (3)開催時間について  
長い ・ ちょうどよい ・ 短い
- (4)左の来館目的は、解決しましたか。当てはまるところに○。空欄は具体的に。

①科目の学習内容について聞きたい 解決した・かなり解決した・余り解決しなかった・全く解決しなかった・左に○をつけていない
②試験について聞きたい 解決した・かなり解決した・余り解決しなかった・全く解決しなかった・左に○をつけていない
③短大生活について聞きたい 解決した・かなり解決した・余り解決しなかった・全く解決しなかった・左に○をつけていない
④その他 解決した・かなり解決した・余り解決しなかった・全く解決しなかった・左に○をつけていない

(2) 相談前の自分自身の現状について5段階の度合いで表してください。

項目	5 (強く思う) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (思わない)
A: 授業内容がわからない	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 試験が不安	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: 勉強・試験以外の学生生活に不安	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

(5) 終了後の自分自身の現状について5段階の度合いで表してください。

項目	5 (強く思う) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (思わない)
A: 授業内容がわからない	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 試験が不安	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: 勉強・試験以外の学生生活に不安	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

ありがとうございました。他にご意見があれば記入して下さい。

2022年度 **担当アンケート【2年生用】** こちら側は研修日に記入

食物栄養、製菓、ファッション、ブライダル、ビューティ、産学

(1) チューターを引き寄せた理由について各項目で5段階の度合いで表してください。

項目	5 (強く思う) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (思わない)
A: 就職活動に有利だから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 有償だから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: 他人の役に立ちたいから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
D: やりがいがありそうだから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
E: 教える(人と話す)のが好きだから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
F: 自分の勉強(復習)になるから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
G: 自分の成長(勉強以外)になるから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
H: その他 ( )	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

(2) チューターをうまくやれる自信について5段階で表してください。

【うまくやれる】 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 【うまくやれる自信はない】

(3) うまくやれる自信のある項目をそれぞれ5段階の度合いで表してください。

項目	5 (自信ある) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (自信ない)
A: 基礎的な科目の知識	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 専門的な科目の知識	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: どこが問題なのかを分析する力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
D: コミュニケーション力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
E: 相手の気持ちに思いやる力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
F: その他 ( )	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

**\*こちら側は出務最終日に記入し回収箱に入れてください\***

(1) チューターとして担当した人数に○をつけてください。

0人 ・ 1~2人 ・ 3~5人 ・ 6~10人 ・ 11人以上

(2) やってよかったと思う点について各項目で5段階の度合いで表してください。

項目	5 (強く思う) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (思わない)
A: 就職活動に有利になった	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 有償だったから	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: 他人の役に立てた	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
D: やりがいがあった	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
E: 教える(人と話す)ことができた	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
F: 自分の勉強(復習)になった	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
G: 自分の成長(勉強以外)になった	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
H: その他 ( )	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

(3) チューターをうまくやれたから5段階で表してください。

【うまくやれた】 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 【うまくやれたと思わない】

段階が上がった・あるいは下がった理由 ( )

(4) チューターをやってみて自信がついた項目を5段階の度合いで表してください。

項目	5 (自信ついた) ⇒ 4・3・2 ⇒ 1 (自信ない)
A: 基礎的な科目の知識	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
B: 専門的な科目の知識	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
C: どこが問題なのかを分析する力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
D: コミュニケーション力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
E: 相手の気持ちに思いやる力	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
F: その他 ( )	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

ありがとうございました。他にご意見があれば記入して下さい。

## Assessment of Tutor Activities as Seen from Changes in Tutors and Tutees

Hisae MORI, Oriie KODONO, Noriko TAKASHIMA, Naruka TANAKA and  
Kaori KOMORITA

Library committee Osaka Yuhigaokagakuen College

### Abstract

A number of methods were re-examined in order to improve student tutors' activities with the aim of better supporting student learning. These methods include adopting a recommendation system for selecting tutors, requiring tutors to attend training sessions beforehand, and paying tutors. To confirm the effect of these improvements, a quantitative survey was given to tutors and tutees before and after. The number of tutees participating in the program increased two to three times since the improvements. Comparing tutees' level of anxiety about tests before and after receiving tutoring, the surveys showed a significant drop in anxiety, as well as a 100% satisfaction rate. The number of tutors also increased threefold.

However, there were tutors who had no tutees due to schedule conflicts. Tutees could not show up and therefore these tutors got no experience in tutoring (inexperienced tutors) . Those tutors who actually had tutees show up and provided them with counseling and guidance (experienced tutors) gained an increased level of confidence in their tutoring duties. This increase in level of confidence was higher among experienced tutors than inexperienced tutors. Because the surveys indicated that experience in tutoring leads to greater self-efficacy, the matter of scheduling must be considered.

Keywords: tutor, tutee, learning support, self-efficacy